礦金勸誘文

寛政二年壬戌中春

三園百、　昭和二年五月二十三日
土曜日午後五時

元屋りて朝から霧ふる雨が降り
続けて居ました。庭庵を門あけて頃に写
つて瑞西の彼岸が見えた。陳列の書
きの所をいたる、ライラックは天蓋
葉茂る。藤の蕾
咲き、プンプンと香を送りこむる。
瑞西の公園の芝生は軒並生
えとしてゐる。紅白の花うつ
りを先づ雪灯のやうな。弥生
隆華茂る然、初夏たることを
告げてゐる。
車は待ちに、チャチ衛の九番の
ハガンドの停まる。亜米利加の手を
水に洗ひ乾かしたら、一人の乗客
あり、つゆ九九しと書き
九アイ、ウサアレゲ、ノオアー

三月のうち、
。せめて何に気が付けしいといつもせ住
ごすることに御話のつげと酸事
することに成る　左生、言凡、
。酔臥し熟睡し夢たものとは思はない。
。来山君と配偶の約束したよで
心つきりの悲酸を味はせん。
。三伏の酷暑つづいたん。
。自分とよ人が交出するのも憂愁の
めでまると言葉を離れて、まことに酷
薄な人のする。
。酷暑、炎熱、白眼、唐情、
。三月の心酔しておる。
。ひとれまで二の向上に学校に貴されて
は人生に古古、酔生夢死するに過
きない。
。寝林まる五十年、貧林、書林、
。
3

○疲れた体を休める。

○痛酸、酸鼻、幼因す。

○年は老いたが、なかなか元気だ、甘も

騒とおく相談し得る娘で

ある。また猫影有り然、作

臥の時は、凡を思ひ、母を依

れば幼因することつる、悲嘆

うれしい時は、喜ぶ事なことも

有れば打忘れて、時々笑

る、（所々大笑したことつる）

○童話に引しく不幸したの

申訳なくは（良心の責）苦

泣きした、

○喘々と吸する。秋々と言し、

○時は心方を苦す喪神する

○喪れの犬猫

エンス、エス、も二ッ、四に、六十四枠に
言ず。はてな、妙だぞ、きのふの電
話は、晩方の午后四時から八時頃何
時かに帰ります、入院しますといふ
ことであつた。それと今とのナー
スの言ふのとは、一寸矛盾してゐるぞ。
まあ、その辺はどうでも好い。と、先づ
微笑を以て私の許に挨拶された
ナースが、二階へか、階段は登
れますか、と、それとなく敬意を払つた
かつぎませうか、と、またナースが
訊ねる。
私イヤ、偏にこの人と考へて辞
めに、十二段を登り始めた。案内
された室は、七五号前、三番目
東の森下紫大吉氏の居つた所
である。これから、と、錯々として定
すると、ビックリしたのは、当の患者

が内室に居る。そして私の寝
甚だキーデルするのだ。
これは面白くもなんでもない如何に陸
軍のお偉方の寝台でも、海軍は仏
蘭西。女性基督の室が居ることので
甚所に私と不和ということで苦痛。室
事有と男への外、軍部と制止
である。枕元にみすぼらしい望遠鏡
瞭、しることと驚かし、先つ寝
巻に替りて、臥床すると、下トレツ
はキレレヤが出てゐる。上に
けるホ線のブラケット二枚、それに
位布がかゝる世とする。
思ひも、美人看護婦ではなく、所
患者の脳獄なよ と心の中で
思ひつゝ。枕元に軍人さまに
気がはらと、誰、元はなるに軍の

屋にすまされる寒さは感じられる
ほどに、毛布二枚重ねてもまだうす
しく思はれること、孔さんは
評判された。
丁度時半ごろなら少論を要
する者は、大四は甚さをかもせる方
法はないと思ふと、ソセズかつ一ぱい
出せの合ライフ一枚するだけ。
居と、牛乳と、左の隅には、生
のストロウバリが有る。と此で全部
だ。さて〳〵質はどうか知らぬ
が量とも海に食物なもの
ある。書食はいろいろ言つて来れ
ばいい朝まづは、喰はずとも
餓死することはないすむ。
三時頃と考へる二十五分の下駄
が鳴つて来た、
「ちたは鈴木さまと中尉殿

芳、斯様なその宿で静養
して居られた。『と聞いたけなる
情をして寄わる。
『知ってゐますよ。』と答へたら
『つんな都雅のある方は来日
は見られません。惜しいことを
しました。』と涙こんで流す
で、北邯一片の煙と化した故人
の面影ばかり、茫然として想見
せられる。

彼は横濱の貿易商で、
郷里で、一九一九年頃の信州人
である。流石の田舎び華ない来
こんな人が、この貴の豊富なひな
かに、或は心気一転して来
る事と、情老同九の苦と
法せられんとの。或る親戚の人
50 都塵を逃れて天霊と慰められ

の家庭に来ることとなった。
御きは美しい女でありたれども
思ひきたりかし知れぬ、家族に人知
らぬ心ありつつ、たりかし知れぬ。
後に二年後、彼は肺結核菌に冒され、華族の友人とか
しか病院に入院された。此療養
と一年つづけて、すっかりよくなった、大
いに好しかりい、性好しなる人なり
ゆえ、母は喜ぶ、母は喜ぶ、
は書きまる、文は嬉しく、憂鬱
する為に陽せなくなりて来たので、
姉妹者の相談、サウナ、シャワー
煙霞療養の為に、
私たちは一九二四年ごろ
と心隠しもある。
姉妹、トルコ療養院に入
つて療法を所定せられよ

故人のためには幸福であったと思う。
が、彼が夢みたのは、ひとつの街の或る病院（外科）の看護婦になること。
それから、数年、彼は、本年、彼は
本年と、三田医学校を卒業し
病棟をさがし、彼女の三ヶ月は
ナーシング、カテゴリと、そして看護婦は、
下痢をする、完薬を換へて、完へは
重患の子を取り扱ふ部に
書房棟のナースは、アルコール中毒
摩擦が、海水と、ベッドと、帰宅
する交代に、そして、ナースは、
半日の、波をくだく、完薬は、
獄医のクロロホルムが、苦しい、
もし、獄医生れなければ

奥さんがいらっしゃる。

私今晩は、Tさん異議のことは
慶と鈴木さんが一番さきました
ようふ。慶ちゃんとしみると、また
ひとりぼっちごきげんは、たうし、
すさか、本ご陣をかおやうは
弱ん行かす、病院に見て暮
夜婦から惜されたは損ん
ら、さっぱり世辞まるに
ひとれは妻せは三セスチンタと
ますかう凸と毒ばたら三と寒
気ばたうと。
凸ヤヤ。凸と慶さん悦しきのかます
慶遠慮一つまをと凸鈴木さ
んは惜しいことにかすまました。
今井務三さんかとと陸多
親女に世話をしてつけたから年

張、河北だけの事。帰ひました。
□
ちと、疲眠し流る。
幸に郵室のベンにナースは立て
いた、
雑誌を読まうと思ふと見た
が枕頭の燈は、淡い暗く濃
めない。まして眠られう。
ふつと座中に眠の瞳あん、天下
森閑として物音一つしない。
星は一つも見えない、青葉の百
かに折々街道の電燈の光が
漏れる。犬の遠ぼえ悲しく耳
える。子供はどうして居るであろう、
この憂気のない冷い空気がまし
なし、子供の窓は明きさうで
は居ないが、アクエス、俺の今は
の荒い働きと、様々の事が考

へ眠り得ないことは下るまいと。悩み
なぜだ、夫のためのためにあれは、夫
をも辞せずに喜しとされたろう、
甚だき枝幾所の時代は二歳
になれば、とうしたのか眠れない。横
臥交側しと居る古ル三時、周
囲の蚊が顔を焼めた、四時と
なると眠れぬ。すると、故人
となった、鈴木さんのことが追想
される。

〃　〃　〃　〃

三時半に成った。朝飯を求める
為に出立、郵の離垣の上に
一列に坐んで母屋の口養を
待つ。座は一林
の薄重を陸ったる曇を知る。
外飾を施したトンドウ医師の邸

宅は、屋根は赤く、煙筒は白く、
壁は赤し、木部は白く、青葉
茂りつゝある枝、ハプウ、芽を背
景にし、前には芝生が青々と茂
りつゝある。

四月五日 日曜日 曇り。

とゝろどころ雪のなき直ナース
ゝる、琉球の道具を持参
し、31度を用ゐる。三時から5
それいと陽気的に働しくすれ
は果つ式だ、斯うして三時十分
の伸に三人の患者を顔から、
手から、口まで洗ひ髪をとし
けつかせるのだ。
七時半子供は朝めし、
バタトーストニ切、牛乳雜炊一、
ペーコン一切ーエッグトーストパン、一個

バナナ、ラッパ、林檎、牛乳等
である。量としては少量であるが
質としては好良である。
九時になる。日中当番のナースが
まるで愛嬢を上げた。
母は世話をしては、八時に體温
を測りませんか、と耳元で言
ったので、之を一平熱になること二
ヶ月になるので、是迄なしと
思ったのと。
母は、是、病院は規則がある
熱の事で代に拘らず報告せ
ねばならぬ。弾ねる。すると
看護婦は
ハイ〈〉と老婆ナースの
前に跪ぎて傳伏した。
大正十二年いと。看護婦は

のカテゴリに分類されることが
ある。其時は熱は高く、食
慾はなし、時を人つ殺きに
するような喧かを、夜、連
発するので、生死相知れざる病人
でありた。それで其所の世話ナース
は大分イライラされたもの。何し
ろ小さい事務所ではあるから、他
種の多い病人十人も使用し
て、尚とも其手を伝ひなら野
や、看護婦位に駆使如と
して「ハイ」「ハイ」とする癖に
障ることと著しい。すると、此
山猫は、（山猫とは、此ナースル
敵した雷光ひかる）田と
田生き、延びたれば、言あしの
言ふことを守るかよい」とする

だ、其高屋には、犯人は外出せず
勝手におしまと言ふ凡に見
ふるのみなる。
所で事件が一年摩養すれ
ば快癒する筈なりと思惟
である。之は推定、鈴木君
の主張を世論し、
たる。
しかしながらまた。
其後古木信三郎氏の事件
を解決したのは、山猫と
意見の衝突が原因である
のイデヘンギと
ナレとするのは、
如しである。
先は横金にされた
犬猫、
四月廿九日、創作、其古

私は床を直しながらふと
自身は室を出た。すると、ピン
パン、音をさして、女は忙しい
立働きをする。丁度大事時の
やうな、床は五分百に出来た、掃
除の婦人は、息を切らして、掃
と、カアペットを取替るとする仕
事をする。

まづ〳〵これで一時半は
記の書けると、胸を撫で下ろし
た。

十二時半に昼食をしました。晩食は
はデンキである。野菜のスープ
和蘭豆菜、すりづス、ブリュウ
四、丁度伊東の銀行倶楽部
だ、アスペラガス、蒲鉾まらも、
焼鶏とトト
焼鶏体へ。パンか二種、牛乳

アイスクリーム、チョコレート、ビスケット、なども、
く上品で料理も甘い。階段
のもとは位置のレストランとを
書いた額掛けてある。上手
だよ。
二時の鐘が一度鳴ると同時に
ナースが再び窓をあけた
大きく開ける
四二時五分前辞しましたさい。
と言ってあでつった。
四時に起きて、ナースが出乳を搾
乳する。體温を呼吸を測る。
てあが掛ってと、また、洗面器を
持ってきて、少めし前にと、口と
顔とを洗ってくれる。
松葉杖の三度のわと第九声が
戸外にする、一丁度真時。四

様の患者が便器を用ゐん
ことを考へたのは三十年の後来ること
そして郵便局に住んでの不表面
の表を見ん見えた。
此時事故、持主は奉天に来
た。二人の郵便を持ちのんで
相互に顔を確かめまんた。
髭を剃ることすること、まん、たとえ
言ふのは明朝にするかまい一體
当方の意味か、患者ノ院伝
中一時五分本誌を、看護夫
に病人のケースを説明した事が
べきであるる。今は白髭はひまる
ます、多分明朝来るだらう。とる
やうなことを
葬参と通帳を渡すこと
来る三十日はテクレーエルテイ

でちる、赤い小さい花を胸につけて
ゐる人を見る。日本人に云へば抵抗
と、盂蘭盆とを一緒にしたやうなもの。
この日、邦人社会は御墓詣
り前日、定例の三十九日午後八時より
仏教教会で追悼会を開き説教
説教おすむ。日本人共同墓地で
三十日の午前十時よりロングアイランドの
パラマウント・オリベットに墓地(葬儀)
を催す(ささやかな。)商墓地にかかる年
オーシャンパークの渕と数花園に主宰
された人々は各車の御農高志を
ると云ふ事でした。(この墓地をいのるための
の養竹龍唐を偲ばされた。)

盂蘭盆と言へば百十五のお仏事
あんばい
ゐる。地の弾唐のは百姓の飲食
と祖先の墓に供へる。

く
く
く

まだ陰の時分であるから、もう五時半、
オヤまあまあ、ラムネ、ラムネだなあ、
これは確に英国式だ。スケート、ホテルの
焼けたもの（焼跡）の様なものあすな、と
いう事で思うん。それに屋が
と思うとこっこ二階になっている。そう
ホテル、ガーデン、ホテルか、ゴサム、ホテルの
神戸だ、一通十五年の春晨の出来とは
思ったが、主婦カビンソンさん
若しかなかったのものである。
その夜は、サムノと寝て、時
八時頃、患者と騒ぐ者の声に眠を
醒ました。

廿二十五日、月曜日。
曇天、変り方のことはなし。
四三、八〇、四三、八〇、と大喝一声、
階段の下から主婦の声がする。

「イエスとしふこと、すはたくしし
隣室ふる魂すれた、悪夢
に向つて曰し、
「僅か三日百の患者のために、二
万の準備に費して、れたすれば
なぶぬと、馬鹿の流かすうるか、
今日の朝から、直嘔吐は、どうし
ようか、耳がしゝれ。」とナースに言ま
ねてみる、頭る三平春田清血の
影が想見される。
「どうしようか、」また三度わること、
「アイ・ドンノウ」とナースが低い声
で言まをすると同時に、ドに
ア戸が開かれたので、事情は
はとうたのか、それるもしかす
なめんん。
（三人ロビンの、霧庵しん時、
天の如く、悪魔のもし。）
「直接とうもうけ
どんな

陽過手段を施されても、
晴は
遂ら生くることを、永久に厭色する
ことは出来ないものである。
世性悪者の脅迫に、金のために
はまた、新参の女性悪者を加
えて私を、うムせといふ重悪と
同様さして堂々としたのは、達
的としたものである。主婦は、私
驚いたの心を一時忘れ、
『ちち嫌だ、何事も有る世の中、
金と時計の重い口に往きたく
なれば』と思ってこと、屋しまる。
此の引達の宮かぺ中で秘密
1と用ことか出来ない。下宮と
イラやと拭声して、ずけ、ずした
が明かぬ、ナースの婆さんに試
みれば無論左らよ、それと、前後

熱気が不充分なストーブ部屋
で、朝から元気がない。
正時になると病人が所々陣痛
のために、子宮を抱えて苦しがる。丁
度看護婦が椅子の患者10名を
用意をするのに、彼女は、ぐらぐら
ぜんに、用意して立ってゐた。
誇るべき室は、私の寝台のすぐ前に
ある。室内は、用意の
前にゆすりゆすりすべしと教へた。
子宮の中は、電気つかず、蝋燭
をともす。この我の話、レヂオ
の流行とし、擬作は帰る。
夕飯が済んで、宮外を眺めると
トラックへ一度所の事。ナース
を呼び、三人、左右に分ける。医師
カルナーに向って曰く「Iさんは、永

年輩と共にどうすれ
は好しかの知れぬ。中人の
する為に仕事を重くの好い。と。
そなたからナースの私にみすから感
の大分好きなんん感じがする。
。大方のノル中ー婦人のインヤラ
と若き女子戸を共にしたもの
新しい空気がうとうとする。

Pic operation

Stay 4 weeks in Hospital.

Board room #6 $168

Operating Room $10

Anastites 10

Physician

Dr. Webb 200

Board & Room

for Nurse, $3 - daysone $84 —

4 week. 4. for 12.

$28 - week $168 —

Salary 2 Nurse

2 Nurse 2 week

1 Nurse 2 Week

168

10

10

84

168

200

640.

Out from Treedean

7500.

53
~~60~~% of 7500 . still alive

40% not alive.

7% Missing.

Rumen とう患者さまの日記

Life Extension club の会員となった

受持医師の病室に表敬訪問

に招待されて、ごあいさつ申し上げた。

すると、其医師の言葉の中に、勿論

静養、安静の三字は、ハッキリ、

なるべく腹にたゆ何かの重き

ものを載せまいこと、ひとつ、

正しい呼吸法を教えた。今に、

つ考へて見ると、あの医師の言葉は

ことの皆、成すべかざることを

せることとしてもちろん、

貴様のもすり許へ、やうと

年護士に相談したら四勝つ

見込みなしなんと言はば

医師は自分の信じてゐる療法

を勧めたのである。仮へば、脳炎

の患者に成医師は室を掃
除し暖房を用ひて病室を
用意し空気を入れかへる事
上の注意と信じ夢者
は死すると医者を罵すること
多き事なり

七月十一日 夫人は出きぬ
レガー一元医師の十前四時
ごろ書かる

○四人一所、寝も八所とするは妖
婦のこと、強て為さる働き
働き有れば強き。怒鳴れば
其声サリーのごとく、家の中
で仕事一なる家の外に働
くものに強すなり。
四アイ、ケン、モウ、ネール、ビ
ス、モーネンス。
四釘を嚙ミ切ること
立つ
四

Fine as silk.
Fine as breathe.

此の世の中の人と世をうらむ事
は不幸にして、隆森止まず、
外出も殆んど出来ぬ様なし
度は花れば寒しのと、流
長雨も降ぬといふ天、イマし
しい、それに今日は、天青く
凡情し、気色爽かなる日
と思へば、心外雨に降られ
て遂に遂みかりたしなる
と責てみる、最後婦さん
だ、

。悠唱るる如く花と豊隆の如く、
。せくコロびたん、モーメントに出も
まん
りゅう

。隆々たる雷声、
。隆隆（リュウリュウ）たる顔が引きしまる
（隆窪ずに）

○ロシヤと不可侵の監視の下に
十幾人の傷者は悲惨として
働くのみ。されども世界の逆鱗
にふれるものなら、力場一声、豊
隆の如しと世界唱る。おそまつしいこと
甚だし。まこと冷酷の剣な
らざる時は、青陽の如し、彼
は如何は恐るべき幾人、彼
青年は青年の幾千人、
○イモリ、どうぞ、メダカ、
ピキカエル　闘争
桃園中　本人のペット　蛙を
みつけ
○イモリや鶏、ヒキガエルが
本日人に玩愛玩愛
さいてみる今日、他一人の日本
移民の一人を弾さないとこの
は、一体とうしたのだろう
蝶蝶はあもり

考へ方に依ては色々に思はれる。日本稼業は何もりや
ときかれた時の能率がないと
いふのだらうか。何もりすぎ
しやらしいとゆうのだらうか、
日本人を何もりや易と
一日さうとゆうのはいけない
人を見くびるにも程がある。
と憤慨痛恨せずんは止まず
すべきなり。

○青山龍雄氏

は言ル御書先住者のパイオニアである。
同胞の為め身を犠牲にして一肌
脱ぐとゆふ親分肌の人。一寸見れ
ば、精悍の者と、こわい人と云ふ
方隣で見れば、上と親切に面倒
見てくれる父つさんのようは温さが

感じる。

may 三十一日は雲が土砂降りのようで、じっとして居られるとする汗が流れてくる。八十三度、とても暑い様なる、真昼で居る。

○お郵人は極めて正直だが、身持の悪い陋軍な奴らなると、何事を遂へる事は一寸駄目。

日本食料品会社 150 / 465

件桐 会社 324 859

都 日光、すし、340 W.58

○ギズの音が身体をゆすぶる様に厭いキールの向かよせて来た。

○世性的の解放

○……、其功果、政治的の何一事の

色彩を持たず絶対。プロレタリア階級（プロレタリアート）を主体とする産児制限実行運動（実践）を進展せしめる事を為し、四つのスローガンを確立された。即ち、

一、せる性的解放を要求す。

一、無産人の精神的幸福とはから産子的に行す。

一、傷ある子なるその親の責任を問題す。

一、正しき性生活の実現を期す。

May 十七か

。傷痍軍人、産児制限、貞操問題、婦人

年を送られた。

Sore ekiyo May 28-1931

Dreigeld Tokuriumeru

Dreiina ranuu Hurrah

Teuma nuuu

東京に於て逝去する

吾恨達磨先生

中條精一郎君遺墨

及び厚知遺族諸賢に告ぐ。

謹て申す

訃報葬儀、既に、昨日、外は

つゝ年中ました。

埼玉県と所沢市の有志の方と

相談、いたします。

電報は三日遅れましと病院

で頂きました。銭金と押領い

たしました。押領致しました事

は、有難いやら、嬉しいやら、

悲しいやら、様々の感じがいた

しまして感謝致した様なる。

なお未だ、まだ分りません。

その訳は、今、祖母は、急変する

やうな不景気だとか、霊界的の
生活だとか、減俸が実行される
とか、一事も悲酸なる記事を読む
ことあります。それに拘らず此大
産出事業や作業を全くもてあそぶ
なと想ひますと何とも仕様
の手とけやうつすりません。また
今日の産としみもうか、産産皆幸
苦、厚私自女諸賢の喜びをまり
無かるべきと意ひますと、生きて
大ほどの用もなし得ぬ私が、便
用するか句體無なる事を
たまりません。若しも私に事の
かなめの在なら、かうすると情
に応じ心配はかけなくつても宜敷
なら、男らしくもなり事を
しなどと思へば新憲に勝

へず、嘆息痛痕、刺膓の思
に攻められて、夜半に眠ることも
出来ぬのであります。
幾年にして私は、病をもって既に
八年夜半、古庭地角の小屋
に、寄寓の身はせし、僅ばかり
健康、強来て強元神
来ず。肥満などは出来ず。
精神的に勝て来人に、攻めては
物質的に勝て来人に、攻めては
来ず、進退両難、周囲
もまた、どうしようかと、飢渇
隠約して居ますが、
しかし、地震報で
嬉しいことは、出来ないこと、
強く持って来ること、とても

無才無学の私には書きつくすことは
出来ません。
愚妻あふ初りまして何から、どんな
ふう喜ぶことでしょうか。
手の届くかぎり拙著は、親戚や
旧友に相違ない、一年ぶりに
東京の墓参に出てきました。
緑家はバルチモア、ニューヨーク・フラ
ンクフルト、ブルクリン市内とは
二三日しなからの訪問をして帰宅する
ことに成ります。
私は三月十四日と考えております。
私は強いにしても、拙妻は、愚妻の体質
金の前借をして調達しました。
私は三角山を高院に送ると云うし、子
供は母宮の未亡人の宅に預けてます
ます。
愚妻の帰りする動機とひきます

のは、今春来、種々迷惑をかけ、感冒にかかり、身心著しく鈍麻致しました。ようやく気晴らしになりたり、身体もだんだん、また元気復活さすのは、流行たる都会に離れ、温泉に解脱するの外、何よりの薬になると思ひます。左ぐ、家事を嫌性にて振りを厭めますんので、つまります。

私は先年三年ばかり、北林療養院に入院しました。ようやく。世間は金部、村の慈善協会まで私をそしれました。生き、体は振はず、何事も一様生色の義すかまりに順ず、T.B.の恐れ郵書時、出しても無駄、働けるまで

五、一、二年と日を暮へたから、

辞言葉を忘れて居ります。

家医の[illegible]なんだからなかなかとくべは、

下、京の権威者、名声動天の私

[illegible]ない人ですから、(名声動天の人

下に難を与る人ですからとするは)

だから、相当の扱方をすることで出来ず、

無官の愚夫には好く親かれて

くれます。私の家には五十銭用の

弟子は無代、其外、三百軒裏

んでゐます。今年、まも私も

感冒にかかる田舎で居た時、百

軒の子供を連れました。さう

くは頂けません、市長意は、まし

とは考へずいか、[illegible]と云ふ

しし方、[illegible]へする時に多くの

だと思ふと居れば宜しそはなるか。

遠慮せずに使ふ私よろしい。[illegible]と云ふ

と、まだ〳〵足りません。度
思ひ感激せずには居られません。

第四庫第二の会では、親切に昨年
の会費四千円は免除し、七月五
日に私達レディアード会員に届ける
執務の為めまで、資格は当分
の会費だけ免除されました。
組織のアートクラフト、リーグでは
一九二五年以来、健康回復する
まで、リース、オブセレスを送られて
ます。会費免除。
かうした母親の皆様から、深甚な
同情と援助とを受けております
私は嬉しく、有難く、
健康恢復しなければ義理
から立たないと思親会は保と

し記さる心頭を去ることなかりません。（夢に待つても来たす）

幸にして私は、住居良好、新量五十五坪、部屋三間、廊下は二七坪、畳傷は少なく、床、障子は新しく成り、家族は一人、子供は二人と共に居ります。妻なれば、二人の私から度の散歩を続められると思います。

御意みとみて、来信五月第四慰藉度（慰藉度）は、大分紛糾の三兼銀行まで面倒拝領致しました。皆様達の方、真情は、死んでも忘れはいたしません。涙を拭ひ、御礼申上ます。

挿貝

昭和二年十月七日

# 芳子胡蝶の病庵

に送る

寿広 光雄

○序幕に於ては、數年の歳月に亦はれ、天涯地角の感に、寂寞堪へざるものあり。財産は調達し、傭人は健康なれども、寄る歳は如何ともなし。花の子どもとして、形影相弔ふのみ。

○元花柳、節操なし然諾を重んず。

○別風霽月、心に一點の曇りなく、清貧に安んず。秋は如何生き、秋は如何されば死するのみ。

正人試意（イエ）

さうふの所業げふのはれ。
つうげは上天蓋すう言と
つうぶけば地上銀すう日し
はんすんばとをまもりの靈、
人の心の正しからねば
人の意のまことはすなわち。

（まのぶ）

日陽言葉に臨席した
星野行則（チカツネ）の後
。氏は割れん陽と寡言に似す
大要たうなく、その他勇武は東
日観と読みのちん。
流れの外のちと故日を観る
まん大高が分る。
。長々は時潮の流れの外にちと
故日を見る時、まん大高が寛

ほれることである。従って政治上の、
社会問題に、衛生、教育、
衛生等凡ゆる方面を考察して
我国の長所を伸ばし、改善しな
くてはならぬという事を、覺ることも
ある。日本は今や強兵政策と
国家改良の二大問題を控えて
居る。私は前者に対しつゝあるが
への移民を奨励し、内地生活は
国家改良の事業に努めたいと
思ふ。事業は、基礎の企
画し、集る在日の同志は実に
有為なる人々であるを頼母しく
感ずる。私は米国に、三回
目の訪問であるが、その日程は
は繁く、公事に忙しく、松方侯爵
の昭和の米国を紹介する。

又は病院、院内、M.C.A.、
に行き、又は其他の社会事業
を見て、家族の社会化感服し
た。米国は今や、世界の先進国
として一頭地を抜いてゐる。お
遺憾なのは、この様大なる国
土に日本移民を殺到せぬことで
ある。割当移民として歓迎
移民問題は自治、日本
国土の狭隘と人口稠密を訴
ひる米人は、今かし日本人を愛
する事殆からざるの言
葉

陳情書よりの抜萃

生徒二百、悉く公費おれ、
学校の孤弱を恣み、彩親に撫養
せり。大いに病痛多く。

磨丁孤芒にして成立するに至れり。
門、窓へ、祐薄とした。
梵々として子立し、形影相弔す。
○席に牀蓐なし。
○辞して去らんとす。
○猥りに微賤を以て廣に寄宿に侍
すること久しかりき。
○座首を隅すとも能く
上報する所に在らず。
○証書を嗜んして座が直嫌と書き
郡縣直進して座が上直を借し
州司の門に臨むこと堂々たり
多し。
○郡の痛日に驚きを以てし、
○苟ぶ私情に順はんと欲すれば、
無辜を許すことを許さず、座の進
退実に狼狽を為す。
○と座辛と同りて、無辜を許す

さらに、

二日の晩伯父と、至微を陋なり。

迎え扶掖を蒙り、寵厚優渥

なり。豈敢て盤桓して希冀す

る所ならんや。

祖父次郎、月に西山に薫り、

気息奄々たり。人命は危殆にして、

朝、夕を慮らざり。在祖母な

りもば次て命は至ること無かり

けん。祖母も在なんば次て餓

死を免ること無からん。母子二人

更に命を相待す。是を以て遥遥

離袁すること能はず。

別に報ゆるの日は短き有り。

烏鳥の私情、孔はくは養を終

へしめたまふんことを乞す。

祖母に報ゆる日我は少なうとさう

まず、為かの文面の差のを書したと
いふ様な私情、どうぞ先祖田を差
し後らせまするうんぬん許しを願ひます。
元来、只、君の手達ばかり望んで、
印度節義などと僅まり程の人物
ではございませんでした。
陛下、恩誠を祈願して、尽れ
微志を聴させたまへ。恐はくは、
聖慮倩倩ん事に鉄年を保
たば、再生きては君に首を預す
べし、死しては君に草を結ぶべし。
大事休懼の情に勝へず。謹言
みて拝表して以聞す。

生きては首をおとして陛下の御為に書し
ますまうし、死んでは草葉を結んでな
りとも御恩の報い奉りませう。
拝 真情の流露して成るこの

又、ごろん同情の涙をこぼさせる。

林西仲は辞しても辞らとれ一片

至性の洗、雖飾と事をすり、

ただ天真爛漫を見る。

○二十三人の勢ひ、

26
15
130
26
390
260

七、せんは十八人の意志をもち

ながんーんは人人の所意もん

都合二十三人の勢ひだそうだ。

意志周ぐ十五年、院すす十年と

すれば二十六年一人分。

二十六人いと 二百五十年。

65
4
1300
325
23800

ちん三百三十八百年。

100
50
50
40
50
150
100
80
60
1680
電灯26
電話100
車100
鉛780
1686
炭50
炭300
1930
250
2180

。國産品を奨励しようと
。私達も面白がって
。面白がさんとともに
。能他の対所作

エンジニア

『仙石滿鉄總裁や、大阿母百敦
博士は エンジニアーを自身が、政策
として 産業を起す 資源を調べる』
とのやうに、従来エンジニアーは
経世家の大策なとに 実際
する事情を持ち出やうに考られ、
エンジニアー自身もさうした方面に
引込思案だから、正実は伸ら
れ虜にはなれなかった。
。一瞬信い顔をした。彼は この秋
相思の女性の。。。を聞き、漸
く新家庭を築くはずの。

。日本人は一般に言葉が少く、特殊
は歌へるが来日の短歌形とはとて
もうたいないかよさ。
。
さうさうの書き方、
。(兄が十五年、弟が二年、さうさう
に下の部部書簡、兄が十五年弟
二年と迄うた、すぐ次の日元の
兄が病気したので、帰宅し
た。ピンピンして元の伸神病。
ようやくもう死ぬ、後の後
病床にうつる。
死すはしとさ。
。元天長節、毒一撃。
。支離の左さきと述べた。悪雑
に陥ってこの人情、贅ちゃれば、
里ヤね。こう真情と淡ち
に髪が髪たかしいるは諸

文公の文の力。

。大に望を屈して其の間なし。

。辞書に眼をさらして博学強記を務め、文章作為に精神を正め、その学の深く廣くを、はてしなく尽きて無い

はずなる。それに自分獨、風流ぶさいなる、私の言い

足にまかせて天然の文を探り

なるべん。

。屈由を言い文学の脈絡をさぐったことを見守った。

。翻々として（栩々）強い笑顔、次に

相取り下り。手を握り肺肝を

ゆるし相示し。天日を指し誓言し

生死に相接自ぜざる秘密。全一文

## 子夏碑文の一句

嘆呼、士窮して乃ち節義を見す。今夫れ、平原亜卷、相裏悦し、酒宴遊戯、相機遠し、謝々として強ひて笑語して相取り下り、手を携へて肺肝を披して相示し、天日を指して誓注し、生死に相接直せざるを撫ふ。裏に信ずべきかな如し。一旦利害に臨めば、確かに毛髮の比差なるも、反眼して相識らざるかの如し。陌路に井に陥らるるに、一たびだに手を引いて救はず、反つて之を擠して、又、石を下すもの、皆これなり。これ、奮獸東狄と雖ども忍びざる所なるべきに、その人は自分相と比して評を得ずと雖ども。子夏の凡を再かば

あらず少くと悔づべし。

通訳

サテサテ、士たる者こそは、窮屈した時、却て富貴のうるはしい所を見せるものであるわい。孝子一般の心なれば、平生何村何に居て、五ルそのを[illegible]と言うを聞くと、歎かを怪んで、家隣をなし、酒食遊戯に呼び呼ばれて、おとなし大声をあげ、わざと無理な笑声び誹なりして、下手下手と運搬に搬へ、五に手を取り、腹をおちあけて楽し、天のお日様まても指さして、五に深とこぼして、たとへ死んだ者とは嘆きまいなどと言へば、実に至仏なるべ、いかにし試しやかである。かすて、一たび力さ和金問題に持ち来

ることを大変、おづか髪毛ばかりの
事かし耳に眼玉をさしこみ、さしたり、抜
めから一言も発することの出来ない
ほどに相手が、危険なオトシ穴の中
（陥穽）へ落ちこんでも、せめて一言
なりとも手を引き上げ救ひ上げやうとも
しない。それどころか、ますます、知らぬ顔
無情の中へ押し落し、その上重石
いれをしドサッと下すといふやうな
無人情極まる、寄ってたかって、
としるべき振舞を為す。大抵の
人はこれだ。誠に食獣や狂犬の、
抜のまねを知らぬ者ども三つ巴んで
事なきやうなことをするに、その人は
実に事実なるべし、うまくいやれと、
ふ位に思ひ居る。今この事実が
自分と窮したる先、友の救

を支はせんと自分がわるい所と代つてやらうと子夏曰、これを聞たらチットは人に恥かしいと思ふことをつかふ。

人情程度なるまの実にはよく見られる。これを重の主情がいかく自分をなる。

八三四、子曰、利時少年なりしや、人の為にすることに富み、自ら貴重顧藉せず、讒へらく、「学業をどころに就るゝこと。故に堅しと雖迫ず。既に迫ずられては、又、相知の実力有る信を得る者の拙拙する事し。故に卒に窮商に死して、林は世の用を為さずして道は時に行はれざりしなり。子曰、晩に行はれざりしなり。子曰、君子は自ら其身を持すること、己に能く、事を、刺を知らしめば

才能ハ
亦自ら年けうれざりけん。年
けうれざる時、人すゝめて能く
之を学ばしめば、仲すなん用
ひらるゝ窮なきりけん。然れど
も、子厚、年ばかりに之しめ
らず、窮すること極まるさりせば、
人に学ぶることなりとすらん。その
子厚の辞言、仲ずい自ら才めと
ゆるを仲ず後世に傳はるしとを恥
すること、今の疑ひなきが如しとする
とと能はざりけん。子厚のこと。
願ふ所を得ず一時に褒称な
らしむとも、後を以て此に見
へなば、誠なか得、誠なか失、
仲ず能く之を辨する者なるん。
・自ら顧み懺悔すること。
穴居窩とは御伽草子の地

また日のはなしことである。

看護婦長 事務 ト・林の失敗

ヒ人保護室の旧療法室 みんと、言ひ乍ら、メイムス、を強しと

脚ふ先。時、二日十四時 時々

ヒ手高十一時、

看護夫、

看護婦を呼はなければ、

なぜ呼はぬと、焼金をなすと

怒る。呼び鈴を割り

たりと言へば、朝に出ずとい

ふ。朝の看護婦は、又、

なぜ下方は、書中に鬚

を割らぬか、と文句を言ふ、

朝にすべきか、書に出すべきか、

患者が感ずること甚だし。従事

たれば、コアポーレイトしてから

うとすれば、彼等は、……
聞くのは、彼等を四五回も用ゆる
もうなら、翌日は、彼等を使ふ
とれない。こゝに剛に行かすると、
しんどは、剛に四五回も行くもの在
ら、君を持つて来られなし、
一人の患者を一人の看護婦が
取扱ふのは、為が宜しきを。
手が届かないから。一人の病を
送り、三人ルラップをとらせ、三人
に休憩させる。四時頃にせねば
ならぬ。其の頃に、電話する
が私用、事務者もある。医師
の巡回、三婦が雷のやうな声
を女中に怒鳴る。エキサイトする
こと、為で、お事情の御察し
同様だ。よく調べて見ること。

病は看護婦にはなれない。怪
注者いなる。
お書きとなれば十一二の時手
を下ろし、床を敷かせ、ブストを
させば、サラ〳〵寝せるとも
よいのだ。
○鐘鳴漏盡、好なり
若し死一、二ヶ月、
○長命吹況
○長月雨耳を去るべし。
○事務する人なるべし
日給夜番禍なり、明治
先生の生活、
○用意、用人、番人、
○寺松先の文章の用語は
なれ難きすぎた。
○死ぬまでは掃寺せ菊華

○私信や葉書の教師諸氏を
ついまつまん間、慶賀感慨
に堪へず
記載する。
○男子として恥ずる事一つもなし
○同時の私、暗愚の私、
○夫たる私、事ならざるも、
○事は事情に感激し
候間千なり

陽春の候愈々壮健の段慶
賀奉り候、
扨者庫番の主事に在り
函館の勇り多年事日に月に
紐育第十街に庫番事務所を
設けられ彼月一流の庫番に仕
し邦人の為めに気
を吐き孫に
恥ぬ事業を為す人格を発揮せる
技術とはよし多数来人技術者
を流布せしその業務は堅実
なる発展の途を示し同地の業
界漸く重きを為すと共に一般
の信用を重ねつつ
すし拵術を試験に来りつつ
ありと聞く彼の年生は同志
を以て共に
を実践せしむる事

広所を用意し、ちゃ色帯と
絶対安静サセラレシ。その用地
に移住さんち来うつ動の状
態を抱らと所も同々とも空し
と病床に伸伸すること至に数日
寄りと正来病癖漸と発作
往来頻繁的辞意さ引移
つて積極的の療養に努めつつ
安管再起の日の速かなんこと
を望まれつしつる状態なるも
病餌数日に亘て来塩の突
漸しなしたるめに同居母上は
久しく日一食を節し此来人
たる夫人或は子供庶の時妻
るとして或は日曜二の我の教師
とも自身の体養の時やい
稽程とて一意一命の生

計の資を得るに始め十四
才の男子ヂョーンレー氏あり
イスクールに通ひその修業を
終げて未だ連要事を所
に依傍の生涯に勝し以て僅
かに得る所の度を以て分点
が英国に代へつゝ主なる商
秋に対し二年の永医たる
未だ医師に自ら百度を賜
つて表彰状の一度の拝
に充てんことを申さるゝ時に
親しく温かき食物を贈り来つ
て氏を慰めるものゝ未だ
越えざる師に感謝の為
人間の真情に感じつゝ
とは親しく同氏の北
ゝ計に在るなり

吾等同君が近き二年間を新
又その石鼎の気魂を知り得し
今日四陣皆人種を異にする
異郷の僻地に空しく病軀
を横たえ、僅に女、郷陣人の同
情下に惜しく獄一の身の運
命を凝視しつつある同君が胸
中意外の思ひを宣すれば
今や徒に座視し以て天公が君
の家に幸するの日を到るを待
つに忍びず、こゝに同君を来摩
知者位の所用情に慰へ度
多の所醸を得し孤と同
君今日の窮状を救ふ一助たら
しめ何率多かに拘らず此事
に作賛同下さんことを切望
に不堪切故虔実行不下

次書中所相談事得貴意之申候、　拝具

追伸貴墨内容意の方の百
は内仏壇の有志内藤誠
氏社人に依頼を有候、
昭和壱年　月　日

毎星陸位
阪岡　亩
播磨市役所
佐野彬品
香取達雄
中條精一郎
長野宇平治

記

一内壇内中仏は第三五日まで
表、内陣正面十五日まで
に取り、振替貯金口座に

右京六〇二七一番電話中條
康平ヨリ電話アリ、発信者
先達別紙振替用紙封入
形式ハ使用スベキ
好都合ニ付事
一 発信者住所の御願ハ遠藤
基地事務用の宮城県を表示
き事及宮城県ニ送金ヲ懇願
至急発送御願ハ精算書ヲ上申
報告アリ、得意先形式
方ヲ発送人ニ依リ出張する事

陸軍工ノ分

一〇〇、 佐藤安
二〇〇 竹中商店
一〇〇 宮崎壮三
五〇 青木松太郎

一三〇

# 書下座敷

○サラサラと云ふ鶯蓋の音に、
離離蓋蓋ずらと云ふに
八年在り、
○私達の座敷の時
読を置いから出は芳般
ちゃん居られない。
○婆さん迫嚇玩蓋に待つ
○毎朝は、雨沈順延、の日曜
日に決定した
○雲助天狗と恐れる私は、
○雲樓の郭、此夜雲隠に宿る
○雲輪拝論一歩、雲箕
○其人格の高尚なると雲甲
○白鶴の如く、ゆる。雷様先生、
○一時疑はかかる人の事

新院の別荘に雲霞せ
れて、清見潟と云ふ
。世人まどろむからとふと雲間
の眺めすることゝ出来ない。
。驚天の雲霞とれ海に高く
而も新らし、
。自雲霧々林を隠す
。五岳仙人の書画の中、
。周口一書、帝国中興の
功績を誇り、私をして感慨
ある国情を喚起せしめ
た。
。続いて、四かうの事柳会始し
取室さんたのも、博さん、五郎
さんの応援ひすり、四と、拍手
仕て、熱さん声量雲りと流
れました。

これを謹聴して居りました私
は、ありがたい、ありがたい、ありが
たい、勿体なさ、すみません、はい
篤く、ゆるしをうけすみませな
い内と思ひますと、感涙
こぼれた様な得ないのみ
ありました。
○次図はありました、一命を
救助されたる御護の言葉
を、満且儀式、読書び
通らぬ私ではは、私の言ひ
が許しません。
○世の中に、佛ありとするならば果
元也、莫逆の友ありとすれ
ば是元也、元の真情
銘心銘骨、何ぞ忘るべけんや、
解して学ぶ事を忘れます

○市用屋と所元売パン屋より
所通知のと持参し、凌
雪の高先を屋と印度
人たちは隣の夫人とも
はげしくと激服致居。
○十生、就職斡旋所すること
ここに決せり。
○元先生節酒すると然
強を言ふるるとかなりさ
ます。
○七、就職斡旋所、人煙稀
なる少長に至る。天に立ちと
屋と二百円を与へて居ます。
31日三十三の朝、
まるる居ち之我のコメン
スメントに差観ん主ける。
屋内生事用として拾言一つ

と情い。長崎子の土人は
折々おそれいる第3陣外のか
猫か、すやすやと眠をみる。
宮外は、蝶の糸を弄ぶ
必ず、靴、靴の後に隠れ
り撫ぐ子ある。外光の
巨樹、緑、第3号キーの
屋上に、海鷗、鳴く。乗り言の
も無味なし。安眠れん耳
を付ける。

アマ丸
雷

第四政治ぶりでは五人に
は理解なし。唯五人
は理解なし。唯五人
理解の事務なしのみでは
第四政治家自身に解せず
さる。

マルクスの

經濟學說は經濟先とする

研究し至る所なるべ

日の爆撃とともに防空壕

新聞紙の燃料材料に

しる所なることを気付かれ

は立ち上り慌へたり、

方動者防空壕の気つかの

無駄はなかりしと嬉し

夜燈防空壕の

遠場に来たるべき

母望う福、来たると叫ける

雲輸拝法

所感覚ちとる

電光朝露の如

雪下孤若

○三千大千世界、山に見るの春

○霞漢　まさに、大空、蒼空、

蒼天、碧空、九霄、碧霄、

○其三　霞壌と高下す、

雲泥、月鼈、猫犬、千里、

○喜雨　霖沛、

○ナイヤガラ瀑布　二流に分れ　セントローレン

スに注ぐ。霖々と降る。

○霖潦たる揚子江、

○人を見て

人を見て自己を知る如く

外国を見て始めて我が国を

知る如く。

○櫛髪の身は、

一霽後の月を待つのみ、

一霽月の光風、

。近来校舎の霊況は拡張し
べきものなり
。こは実に国に忠に義を尽すべ
日本の務をなすべき仕事なり
るべからざるべし
。愈々便宜に従ひ、慈海一
朝の好に処ざるべし。七月八
。土地を有すること数千町、信者
数千人、その収入は次の三項
及び服装故事に仁なる足
り。心に安ずれば一境の人喜び
必ずあまねきれば一境の人間る
。寺院と無然にせり華厳寺
と成らん。鞠躬盡瘁
。五老と共に筆闘五教
年。頑頑として此雄

ならず、

○

○人を欺くは人を欺くなり、

自己を欺くにすぎず。

私がすきなことは、何ぢん

うためにすきなとしるべし。それ

を私に隠しておくのは、恥ずかしさの

ためを欺くなり。病気か

夢化して花ひらくのは、私はなほ

心安かりきるる。

○人は芸術を以て接するのは、人

から芸術を奪ひ取へられる。

○人は最高を求めるは、人

また其人に最高を与へる朝ゆ

うめくする。○文

○政。文映は、人と新

聞なし、

。本偏人ひとりをまもらし
。倍長子流れ美を稱む
をしてこの流弊をなすこと寡
きるなきなり。
。文辭詭激にして太まし
実なり。
。生きて尤物の用をなさず
性、無積の類鈍を積
べるのみ、

昭文化学会創立者 1931年三月
南生 押仕 老生、

清史

幸昌の使、育壺中指を奏し
中清使 光廣賀地事以人
中度昌日廣之 新年押仕 押
流光先生、押流光先生は

昔日の老聖を直侵そんしません、
今日の老聖を、侮辱そんしては、
横暴、学敵借と不敬め、
聖の部は次に述べるかのごとくなります。
凡そ、人と人とを交通は、直に相識
至に敬する所をもって謝し親しと
なるものであると私は信じて居ます。
まして日民と日民とが交通出来ては
出来ではありますまいか。
日本の日本国に十年後開国、こう
して居ては、平生、口に親善を
唱へ、行に誠意を伴はし時所を
もして握手せんとして居ますのに、
彼等は親しと之を悪けんとす
るの傾向あるのは、一體どうした
ものでせうか。みをして言はしめば、
如彼等は去て、日本人の日本人たる

行くと知らないからだ。と。

借しむらく、日本人は、未だ日本人のように肉体的天恵には豊かであります。

軀幹矮小、頭髪は黒く、瞳は

丸く黄ばむ。とふうに有ります。

ために、心なき未人達は、一皆しく

黄鼠傷方の元気なく、邪

人を嫌厭するのであります。と。

要らに、日本の蜻蛉や、蝶蛾

などは、あまりに繁殖して居るのに

雌一人の日本移民さえ、少ないとしふ

ては、甚だ、元気なるか、はた

狂気なるか、甚だし無謀な

ることなどと嘆じて居ます。

四面楚歌。何とか方法がない

だろうか。利のために役立とし之

するもの、窮乏甚しく利のために

動としの、花とと豊の陣に毋誠
すると会せ、七月の間脱十
数人とみるが、右松民族義
廃されの、率先した日本人を、
明らかに朱人に知らすとも
日本人は、「横」と、「横」と久し
いるかるか。
うしたことの高を呼ぶ。
地味なりと、日本、この化学なる
七月、祖国先生の後援をも
創立いたした、廃は二日や大
学の国歌で、創立者は
角田、柳作氏で、すると耳を傾
は、作家の身で、私は拍手
とと喜び、感謝を賛辞した
ようなもの。
柳と一周年講演を使用に

せようとする人は、その才能が
なければならない。この才
能とは、ある種の特殊の技
術を持つ事の術に優れなければ
ならない。また、この技術、
術をもって而して、ある種の靈
妙なる感情は、言葉の才能は
想像せずんばあらずである。
私は信ずる。
もしこの美術家の事業
を徹底的に未人に服従しまう
とすれば、私は日本の文化の為
の眼目であると信じます。故に
日本の文化の会の須臾は暫く
現世に於て多みのみならず、百世の後
までも必要の事であります。
是等の事業を保護しよう

る時に、老重の印象、強度
にみると嘆然掌敬措く能
はざる所のものあり、ここに
有るものと考へます。
俺と今用は私共、家事事業
さて困じ先ず、深甚な
る内情を知り陳述とします
再び自宅静養すること出
来ません。誠に残念の
ことやるべきもの有ります
兵隊内務を感謝
致します。
命令に従へし軍歌に
声を配します。
1943年[illegible]三月
夜半徐ろに
[illegible]

○凡神陵に霊に近まること
叶はず、
○凡患三十出来し、肺患十五
○肺患凡患日に〳〵多くなる。
○肺患凡疾、すこぶる恐るべ
き病なり。

後の文章

○字中皆凡霜を挾む。
○後の文章は、抑揚頓挫、
摘進すべし。字中一丈な
凡霜を挾む。
○措辞に生硬粗筆のあるは
免れず、文に堪能の餘地
あり。字なる享録を飲し、
欠陥を補塡し、此面を毛ず。
七月一日 193 たる。
○陳子南凡来りて患を慎し
午后三時には麿に九十度

る、金山に、たゞ一人、

。西南に当りて、アンパムと称する海抜五千尺の山あり、

碁山の麓（ふもと）の吹雪、

。殷芝之親、鴻毛之重、

。長友飯色、錦衣錦芝。

茅鹿門之評。

。元法山かこの序。

読短く、意長く、美しく事実を敍す。辭（はなきりと）にして、華（はなやかなること）なすず。

その文直、その事核（事の心）

美を虛しうせず、要を隱さず。

。之を金石に刻むかゆきは、844、

文学の死と共に死ぬ性質ならば、

死雖かの面しと為すのけんと

○前半は実を叙した。この段
しこがかなり面倒だ。でも
大魯堂の作品が歴々と
して見られる。後半の歌頌に
ついての意見。短評で、やや
説教的である。僅少の文字
内容はゆたかに、変化多い。
殊に結句無限の餘情を含
んでゐる。
○ちとかぢ者の苦心の存する所。
○略歌は今年鋒、仔細に眼を
著けて見よ。

なでしこの　はなのさかえも
まろがれば、　すずしくやどる
とけうらんつゆ、

一四二

。原意を、鋭しく、多く誨せさ
るために、無限の情趣あるか
と思ふ。この者の演生産、支離
の感をかすし反映なく、最も掴す
べき味がある。

。子供のこころかなる情趣韻
致は、熟徒しも知るまじみは
なし。

。歌人と信じて天陵を失し
酒屋流獻は、時の呼吸の
打ちそと大声を出す。（三二、

地主屋集　千八百九十年
夏見屋集　一九二年
村井屋集　新潟七九年仙台市

暑中見舞

頃者如何なる暑さ、
にやと伺ひし
今、まもなく
真を押し、再生の
に対し最敬礼
服部三郎
書状を送る

五松下、

松井兄

陽光したたる日
十日、西も東も分
べうしかまもなく
すると共に、孤影
まで来たは、ペン

十二年の秋
伯爵宅中、
し西の人
さびしい
ステーション

ゝ古た。　事務倫理

孤影悄然と　信事神墓

一神社を見せしよかしと、凡来坊、

長年と所を教へことれ、

毎日93/12七十七才、八十九回

年寄十二回ゝ

日女は物質的恵豊なる

ゝ、恵まれた日だ、

彼の食べ　信まる年寄

日女、人は恵まれた日民ゝ

幸に強い偉いものと持つ

母はいよ日女、小祝尊の痛

感するは、頭脳明晰、瑞祥

に富み、情緒に富し、就て

の他民族他日民とも土敬し

心臓を悪くした人の「直ぐ倒れる」ふ物忘れである。樹言すれば、子成り庫に安んじて大器晩成の耐久性に欠しとはなしう。

でしと喜喜国を味はすれば

発酵うと穏が足らぬ才が鍛すると信が足らぬ、邪ろ、是は宗教的観念の薄弱なる反映である、甚し信する者は老いず、老いるものは死せずと云ふ。僕の老るを待たよ。西と。

1931年12月1日 新報より

十二月日角

敬墓する

五郎 五九歳

若宮弥助 その兄 茂木桃平

寿史

たびのまれ屋と高木清吉が
たとえ折板、この見慣し屋
者で何より喜ばしいことです。
屋敷は廣瀬新一郎に拝借
致しました。拝借料毎
月、昔の義兵を追憶致し
ます、今日の義本桃井伍長
長の義兵様を敬慕致し
ます。

昨日はフォーブスライ、で
ありました。
二十四年前のフォーブスライとは
の日、義兵募集者に取りては
至誠至要の一日でありました。
四五屋とは、七月四日まで
家使を外へ、同屋の敷定
海まきはくつは拙目だ。四と木林
の爺さんが亡くなったことは、一年前

しと宇内は耳をすます。之時、
老婆はクシャミドンと大きなる音を
中にあるん。利吉を寝かせしも
玉屋の番頭さんを務められ、
朝は、海嘯と正しく働き、
夕は、疲れたる海水浴客に寝
不安の夜の更けゆきるん訳
は、激浪澎湃、渺茫
言し難きものとして、いと淋しし
感じたることし夜之を、其頃
ゴ主、番頭達方
九歳ごろ異にすれども、同じ
所に同じ音響、見るもの
耳しゐまた同じ
(メリケドラの婦人帽子の
傳りし頃ひちん。見るから笑ひたん、
見られる者に寄する。の
去まで同じうしたうちもし
た。自滝九ゐの者す所は、

酒にちかづけず世にちかづけず、だた
ひとりにして酒たべてすごしました。
明るい流るるみ、一度ちらしは、
またと故ちり、悪な言人とちら
と遊ばれ、主は姉とちらし
世に廣したなどすることです。
ここに二年を経たらいすこです。
曲顧すれば十年前、主事
ちを体い銷夏中猶義さん
の庭に三度わたることちりました。
基金、三万円、おつるスの郵便
宅い訪れ申れ所、此一九〇七年、
主等、日本の玉屋を辱けんに、
基本金四千余の秋書後に、
ギャンブリングとして訴られ、稀
拘留せられんとたせしことち
き、基時、厚基金没収れ

し者の私は一人なり。と中座べきんら、三人タ、さらスは、破顔一笑、高声に、ヨオ、イエス、アイリメンバー、ユウ。と強れた。

すると、奥さんや令嬢達に脱がせられ、手を強し、昔を流りなりんら、何ひは座と共豊の情景に乃びました。刻を待し長座すし、更に前金を祝稿し、辞したる事有之、

其陰、ロ表紙さんは方学生がとうしゝ居ぶれる方ならう。と感立、

回想しました。

前月の新報に座談会に会座ぶれた先生の写真もありました。

元先生の隣りに素無とした方らたんは表紙の見びある。

過ぎる温泉、この夏時代の
あとかけにかしし要なるなし、
蓋し市気気の市様子、拙見若
しと雖ひます。
記事の伸ルは、四傳はワレントンに
飛多時代でした。幾木桃サルメ
元は、一九〇九年です。と、地主さ
人のオラエ三郎に左植をされた
た。また、四カリフォルニヤ州屋かト
移ス書さうなしのんか。と、角
田氏の悲観説を聞かにせら
ル左。かうした記事を読んで
飛ますと、ムミ慶喜に接し
た方な、心地かしまとんか腰
かしたなら嬉ますません。
今、市多様は幾人つ、市餓暇
の時、市求庭の市洗を耳しと

頂けますでしょうか。

さて、母の住つかは早いもの、二十四年は一炊の夢と消えて仕舞ました。不幸にも私は、健康を害しまして、公務は用ちて、家を売りて家事を放擲致しまして、遠い親の人間となり、農病に暮し居ります。家は空となる。家財道具ども、どうすることも出来ず、ただ、遅遅両親、どたのでいつまでもあるまじきは、私共さんや、岡田さんに、義後筆ルつて、相談に出かけました。そうして私共さんと鴨井さんが吉葉に行って大の方

ません。

家内が伺ひましたことも
確実は保証会社から借りる、
私は病院に入院する、お供は
未人の同窓生に頼けてあたで
すりますす。

人間とは、死ぬも運命、
生きるも運命、また、私のやう
にして重症病院の危険で変
天を眺んで、杉山の報先を待
つも運命ですりますす。
出発日の早朝、病院の面会
時刻を待ちかねる杉山は用事が
事都合さん運びましたから、
お伺ひ申さいい。と運ばし
ました。其の時の嬉しかっ
たことも、なんとかすれば、
再び

元に帰って静養致す事。ロと。
始ごすれば、感涙うたた禁じ
得ません。
其上重ねて言う志は鉄心鐵
骨をします。この再生の
恩にみては、ただただ、失声
感動、涙とともにあるいこ中
上げます。
帝国へは、家族一同まう呉し
て直敷中上げ相矢
1931年五月
高庵にて

。諸氏でも事業をもう度仕事
を始めて何時ひす庵へ
ら、事をとれば出される
ようにしみる。

○神の平和が今私の心に充満し
つゝある。而して、其平和が、私の
関連した凡ゆる状態に
も及ぼしつゝある。
○私の身體とゝもに、和
様から聘はれたものである
所以は、神聖なるものである。今こゝに神の霊が其中
に宿まれる所の社殿である。
霊とは、其の霊が社殿の中に宿
るのである。其社殿の中に宿
る霊とは、富士の霊である。而して
私の心と霊とは、又私と霊とは、
之を識して、神の平和に
心を置きて、神の使命にさうし
働く事は、誤りなく、為し得べき
ことは、勿論に為すべき
ことは無い。私も為すとすれ
ば、其人の行為が、神の使命

流行しつゝあるかについて。

良人を体めんとする者、みな平和の人の心を要とべし。

草稿日記を手にみる。

黒漆（暗色）にみえない。

書松元に黒化して黄ばみたり。文章が生きて来た。

落ちぬかだが黒朋しさう。

なぜいかゝ、事に延期する

と云ふ句ヨカラウと言葉

せられた（云ふがみた）

村井氏の話、

質問婦人会の日本の記者に向て

話された所、中の想像の中に、

四 今度内閣の組織に当たり、何か一番感
申しつきませんかと、
差出意見と庫事のかたんし（続
麗に考えいつとき重だ、この
改革されることは考えがしい
(二) 思想問題は、
差出と比べ考つて、しこいつ困る
問題だ、今まで慶應はとも
今も、そんなことの有分れ和
、、近頃思想のそのが流と
ふことは、この為代思想
現の問のろい表面し様
けばたしたことはなりません。
○武藤氏の金の価値を低し
することだ。
○久原さんの二十億の新株の
事業の事を成に考る

。南米に行く場合を考へるたゞに田舎を書くもうんさしとて、良人かなし。

。夏の湖畔

夏　秋　冬　朝の明るみにささぬ
青い空　白雲　黄金　黄色　薄紫　夜
蛙の歌　金鶏　鶴　鶴
老々たる心　音の音　鄙　之
丁の蘭　或は春　一穴　鉢　稚　在稚
鉢　千年　在　鉢　波のしき花
之　し　信　舟の横　言　たまし
蛙鳴　刺し　磨　見　駐
屋の　弱　波　波　月　小
に　ま　は　真の　美み　何
柱　ま　ん　之。　この　様　ん　蓋　る
刺　ち　小　曙　く　神　怪び　老　春
る　屋　屋　ま　ち　ん　れ　酒　を　柱

ニ凡に陥れ、その喜ぶ事を
たるのみん。

○其時はあなたは相好を崩して
喜びます。

○人生の楽なること、白駒隙を過
るが如し。

○鞭を百年電速の如し。

○人生はまた一炊の夢の如し。

○偶任領事の駐札（駐劄）僅か
二年半にすぎず、

○春色悄々、春光のうるおいます。

○春凡敬賀、春の景色のうるおいます

春和景明

○やっと釋明したることなるべ
かわ今日思ひ出すことも呼ばるる

。サンに対して、先ずプラリトーン
ただ
みる。苦言――さい――、退屈さい。
。先生方の先生の舒懷法
を辯聽、辯聽、辯聽――
。真田さんは、男頃の高麦の人
に対して緊張至要の一カ、
須要のこいつあん、
。項頸豚首の相未だ定
。心気一切、晩餐――に俳人に
なる。きけば、何か其訳に
もし頃添せに操
かえる
。二三の洋寓と思先の会
。つまり――此の穴窮屈を却って復利
用した勉強境
。寓居に窮屈
する事

年の窮すること極まりさりせば
みづからを解脱するの意を起さ
ゝしたゝ。
○親鸞を得、親鸞を失へ、
ゆすぬしを辭する者さん
親得親失、ゆすぬしを辭する、
○初鹿野さんのやうに、靜養
十年ばかり後は後、ぶらぶ
つのバラ出るまでは文藝
事を施しまるがよい、

[illegible]

[illegible]概すること然諾あり。

[illegible]志雲霧、先侵後来。

[illegible]を覚ゆ。[illegible]、之のために歩まず。

[illegible]酒を持ぎ、

[illegible]霊徒ぶりは震駭せざるべからず。

[illegible]を徒んで交つたり。

事産で呼び呼はれつ。

[illegible]が[illegible]然として頭角を見はしたりし大敵を叩くと称

賛[illegible]れ[illegible]の[illegible]代。

[illegible]中絶しまさに未没

[illegible]とする。識見高邁。

[illegible]非[illegible]ずんば其れ誠か

之を能くせん。

人を慰めんがために、[illegible]徒、

人を誠めんがために、春秋、

[illegible]

○多大の感あり、無阿の教訓。
○永久に價値ある金言。
○難を夢みる人のをかし。
○魂を行に禮に表す
○文、辯に非なり。
○質なくして便なるもの
○能く燒きて後に人。
○意の如くに成る人。
○すべて、隨分人の巷の作に自
分を忘れ
○月末郵便頭頭しいかな、
○仍しく頑癡、神彩未だ微なり
○頭巻を巻き、
○顧慮さんか。
○鳳凰さんか。
○喜節に感じ、喜振に感じ
○人後喜摩慈心迷はん。（喜條）

Self-Paddle
Wheel Steamer
Richardson
S. Mercer
N. Y. C.

Mighty things have been wrought since those far off days of '76. When Mr Arai and his comrades journeyed to N. Y.

When they came, they rumbled along with the

rest of N. Y. over the cobble stone pavement in the horse drawn coaches, that ran only from Fulton to Fifth Ave.

N. Y. was unlike then. Telegraph poles lined either side of Broadway, and above the heads of the pedestrians, was a net net work of wires.

Beyond 59th street was nothing but country meadows with peaceful cows grazing. When Central park was planned, there was much dirt

over its being called
"Central" way out there
in the wilderness."

The railroad over
which they had come
from San Francisco was
barely 3 years old. Oma-
ha was still a little town
set on a windbrown
prairie.

Attend night School
in Plymouth Institute
on Brooklyn Heights.

Today in Riverside
Com. though he goes to
Christian Science.

71st Trip to Japan
cross Ocean 142 times?

The greatest moment in his life, he said, in looking back over his 76 years in retrospect, was when word came that Japanese were victorious in the R-J. war. "Then all Americans were nice to us" she said, "There were times, when we first came to A. when we were thought to be chinese, and treated us accordingly." It was "Jacob Schiff, who loaned the money to Japan to fight the R. and to him they owe an unending debt of gratitude.

。病臥三年、頗隨意麻
すること甚だしし
。長い臥床し居るから
無理なることが日々に頓
隨意麻痺するの甚だ
しくん。
。集凡現世、
。苦海衆生
。時高朝雲、
もなし、
。食意三年、
。殆らしきと急
。髓を延ばし
。急髓の腎
。一家病人、
。みるのみ
。病ゆとして
。三年大を廢し
。苦海衆生の苦
。先代すべし
。同寛二年
。竜もの如し
。病人、病
。重に減し
。服し

○聚の人の如く奔走務を
奉仕されるまでには、
○多年は大きり奔走なるより
世間鈍の方がよろしい。
○沛然奔成し
○時鑄光に流して再生せり、
この再生の市恩は鑄所光に
必ずまさるは祖母のたゆん苦を
強し死しては章を佐んで性
りと市存の恩に報ん
○時高調に曰く祖母は再生世界
この再生の市恩は仏に鉄し者
に鑄して高却は高尊、印し
て窟に金、生きて祖母の元あり
面強し死しては章を佐んで
なりと市存の恩に報んと
す。若機達成

。足腰なき孫が、祖先の亭園を
誇りとする。
。誠に楽しい感じがする、まるで
。誠に産まれかわった心地がする。
。衰微の跡を訪ねることは厳しく避けて。
。反対に喜ぶべき教訓、
。我々の思想が我々一代である。
。事実さんは日本の社長として
。君臨せられた頃、
。概ね古臭い思想だ、笑ってしまう
。ふとこの古臭い、しかる懐しみが、
。我の手腕した元素の奥に、接吸
。しゝ居る。現代
。孤につまされたやうな元素、
。神に祝ひする。
。同情讃美感心のあるう眼頭
。が熱くなる時まである。

金ってものは。

三月末の朱夜、夢

悪い夢が実現したという話が歌人本人の口に好く用えられ居ます。

夢は心に思ったことを夢に見るのだと言葉は、心理学的に正しい科学的、信じて居ます。人様が金が欲しい金が、欲しい思う世の中に、私は、其境遇を金と思って居ますので金は一銭も手にしない。金ってものは勉強の事業だ。色々に気の毒

夢はかうです。

すると主人の事務所に女。就の中に、日本の婦人を見せられは、表の玄関、電先に立って、売って私とあ、三百円出れば……と

売へたく、まろしい、金策すると下

事務所に待つて居て呉れいとしか。
三十万百円きり持つて来た。
所で、吾輩は金仲間人に頼けし
見込のあるストックを十株に一株
の手数で八千株を買つて置いたの
が、幸運にも四十五万に七万円儲
たのだと、今は三万円を五十円
百円の低い時に世を去つた。乾に入
かさるのび用の回りに百枚の
第五個入れて、計得顔に書
付を立た。すると一旦女に陽言し
ロイヤ、暫しと云て僕の胸を叩
いて、ロイヤ、大した金ロしかな
い、一枚呉れ主人。要求せず
れた。惜られた金中で其事を
乾に少れ山ることしたるし一家の
たばるヒれを五十円の紙幣が

はいたらん、蓋し大要なんと、
近頃の事産に大なる、便所を
借る。甚麗で胸に巻はけ
やうとした所と、窓の上に、
泥棒見たやうな奴が見てゐ
る。困る人なし、借り三万円の金
をあれ、錯計なく所持出来て、
勉強出来ず、明らかに出ない。
それ計りなれば済まれたが生
きても所にもあるが、と、
思って居た。書の枕に唱
を持ち来た。1931七月

十二

かうなっては騎虎の勢、
のるか、そるか、行くところまで
行くより外に論ずるなし。

いろいろ
。駿諸教殿様、しん、至れり
書面より

暑中御見舞

御高配ありし私事一再生
いたし、身完に近く農病に
親せ中長き、この再生の
御恩に対しては感謝の辞
なし、ただ、涙をもって御礼
神仏に祈る

本年は、類らまれなる暑さ、
なれば、暑と御自愛ください
どうぞ孤上を謹言。

当地本年は類まれなる酷暑
に人皆な苦しみ中居、御地
如何にや或、悪敵なれば

ゆらかと存ます中庭

〃　〃

之見る事に成る勧誘の文
拝読仕り拝読致しては、之辞
を重ね雅なるに三嘆禁ずる能
はず也。先生事も起居健
やかは、病臥のまま勉強元
し申しは、私しは、早く佳んで
なりと厚く御愛顧に報
いたいと念ずる次第。之ふ
所詮筆を。
重松元へ　1931 6月 5日

ぶらぶらサンし
駿程鏡々、顔色芳(妙)

○寂寥たるサラナラ湖畔に
庵を結んで俺しい暮らを
しつゝある。俺しい暮らしつゝある

。迫らざる自然、善信たる
凡来、蕉は観信的の人なり。

。非凡の題とは、わびしい詩を述べ
た詩とする題意であるか、内容
は淋しいリンナ軟弱なものは作れぬ
。自分は聖人の道を作り得ざるを
恨としみるとか、世の好中の人を救い
得ざるを恨としみるとか、それが
古人、庭手獨坐と淚を流し
みるとか、いろいろ作ったりする方
る。七七一。

とふうを読んだが、
。一讀し終るや、非常に感歎の
心が起ってやまぬ。また読みかへ
し読みかへして、読みやめられぬ。

# 日会の清遊記

時は、去る十二年一月の下旬でありました。

私は、家族を招待し、家族を伴なひ、日会の清遊会に出かけ、ハトソン河を遡りて熊嶽の麓に出でたことであります。

晴天喜ぶべき、景色かなり水陸輝映す。登山は楽しく、朝日は輝く。

日光出づ、船に乗り、ものの半時にして

ほ黄昏頃、書斎に帰りました。

私共は五十一所目の埠頭場

まり、注ってと叫び乍ら、
大きな近覧船が近づきつつあるのが見えた。
「まだ〳〵、何れだ〳〵」
と、教師の声が私共の周囲に響き渡った。
「何か、日の光の様が見える。慌てるな〳〵」と云い乍ら、
金社員が双眼鏡で見廻った報告をする訳だ。
三四名すると、本校の〳〵の顔が識別することが出来る。
すると、海岸一帯、ボオー
と、リバサイドの天地を震動せしめた。子供は驚いて母に抱きつく、母はビックリして、子供を抱きし

○孝吉さん、何れは立派な家庭を
とるものです。皆さんの事が
ここに毎日ここを知らんとする
よ、たんにし所いことはない』
とおっしゃる教師の母の言葉
一刻も秋の思を、待つ
に待つた四五日人、ぞくぞく
と、ひとりとかへ住む者
は、土列を造る棟梁を
待つ。

○備へ已仕事する
○仕事は二日の花すすし仕なり。

うくひす

○張無き感慨胸に溢れる時
大本苦の情に嘆ぐ。寄か

かゝる夜を見んとは、神ならぬ
身の知るよしもなく。